

学習方略自己評価・自己診断調査に基づく英文法授業の一考察

中 井 弘 一

A Study of the Effects of a Learning Strategy in College Level Grammar Lessons Researching Students' Learning Styles and Strategies

Hirokazu Nakai

抄 録

大学が多様な学生を受け入れる時代になって、英語の授業も従来の講義形式から学生の実態に応じた指導改善が求められている。中等教育では、4領域の技能を充実させたコミュニケーション能力の育成が重視されている。grammar-translation や grammar-based approach が敬遠される傾向にあるが、英文法自体は英語の基礎能力として必要不可欠である。高等教育の現場では、中等教育での6年間の学習にもかかわらず、学生の基本的な英文法の力の定着に不十分な実態が見られる。本稿では、学生の学習方略の自己評価・自己診断を通して、高等教育における英語の基礎能力の定着を図る英文法授業での学習方略を考察する。

キーワード：学習意識 学習方略 ステップ学習 英文法学習 モチベーション

(2005年9月28日 受理)

Abstract

Colleges are now faced with the problem needing to admit various levels of students because of the decreasing number of younger people. As a result, improvements in English lessons in college are requested to meet the students' actual learning conditions. Grammar-translation or grammar-based approach is traditional and not strongly supported. Fostering communicative abilities in four skills is the major focus of English teaching in Secondary Education. However, grammar itself is necessary as a fundamental ability to understand and use English. The lack of practical grammar knowledge limits communication in English. This paper describes the effects of a learning strategy in college level grammar lessons after the 6 years of required English study, researching students' learning styles and strategies through the use of a questionnaire.

Key words : learning style, learning strategy, step-learning, grammar study, motivation

(Received September 28, 2005)

1. はじめに

経済国家として生きる日本の将来を担う人材育成のため、コミュニケーション能力を中心として日本人全体の英語力の向上が強く求められている。文部科学省(2003)が「英語が使える日本人の育成のための行動計画」で英語教育政策の戦略構想を発表しているが、その教育の前線で実践する個々の戦術は示されていない。戦術は学習者に応じて異なるものである。

戦術を考えるには学生の学習意識や学力を把握しなければならない。また、英語の習得は学習者が自ら求めて学ぼうとしない限りむずかしい。教員はそのため、学生が自らの学習方略をもって Independent learning ができるよう授業を運営しなければならない。Whitaker(1993)は、学校経営のリーダーシップの要素として、delegating, supporting, directing, coaching を挙げている。これは授業の運営にも当てはまることである。

本稿では、これらの観点を踏まえ学習方略の意識調査を実施し、英語によるコミュニケーション能力の基礎である英文法の授業における効果的な学習方略について考察する。

2. 学習方略とモチベーション

学習者は個々人の学習動機のもとに、個々人の学習方法で学習を進めているが、それぞれの学習方略が効果的であるかどうかはわからない。米山(2003)は学習方略を「効果的に学習を進めるために学習者が実際に取る様々な活動や行動を包括する概念で、手段、方策、工夫、コツなどを含む」と定義している。初期の研究においては、「よい学習者」の学習方略が Rubin や Stern によって行われた。近年では Oxford, R. L. (1990) が *Language Learning Strategies* にまとめている。Oxford は Language Learning Strategies (学習ストラテジー) の特質に次の12項目を挙げている。

1. Contribute to the main goal, communicative competence.
2. Allow learners to become more self-directed.
3. Expand the role of teachers.
4. Are problem-oriented.
5. Are specific actions taken by the learner.
6. Involve many aspects of the learner.
7. Support learning both directly and indirectly.
8. Are not always observable.
9. Are often conscious.
10. Can be taught.
11. Are flexible.
12. Are influenced by a variety of factors.

「目標」「コミュニケーション能力」「自己決定」「問題解決」「意識的」「柔軟性」などを学習者が意欲的に学習を進めるに当たってのキーワードとしている。学習者が意欲的に学

習を進める研究としては Dörnyei, Z. (2001) が動機戦略をまとめている。

Motivational strategies are techniques that promote the individual's goal-related behavior. Because human behavior is rather complex, there are many diverse ways of promoting it.

ここでも、goal-related と個人、学習目標をキーワードとしている。Golub, J. (2000) は学習の成果を上げるには、

If we are going to improve students' performance with language, we must first make the students consciously aware of the level and quality of that performance so that they can begin to "gain a measure of control over it. We must make the invisible visible.

と述べ、見えない学習到達状況を目に見えるように意識させることが大切としている。

そこで後期の授業では、担当学生の前期の学習状況や学習方略の意識調査の結果を把握した上で、学習到達目標 (performance objectives) を明確にし、学習方略を構築することに努めた。図1の矢印順の学習段階となる学習方略—自律学習へのステップを進めることが学生自身の主体的な学習につながると考えた。

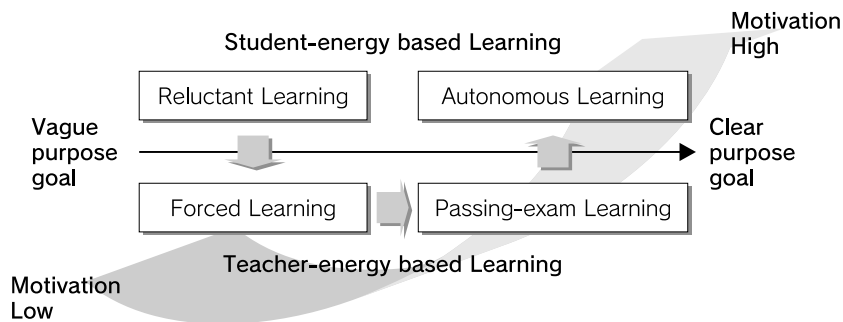


図1 自律学習へのステップ

3. 英語学習ための学習方略自己評価・自己診断調査

Oxford は英語学習者が自己の学習方法を改善する際にチェックする自己診断項目 SILL (Strategy Inventory for Language Learning) を考案しているが、これをベースに松宮 (1999) が開発した日本語版高校生用英語学習戦略質問紙 (SILL-J) を本学の学生向けに修正して使うこととした。「単・熟語の記憶方法について」「英語を学習・理解するための方法」「英語が理解できない場合やコミュニケーションがうまくいかない場合の対処方法」「学習の計画性や自己評価について」「不安への対処法や解消方法について」を質問内容分野とした。

3.1 被験者

2004年度英文法を担当した本学2年制短期大学生28人 (a~eの5段階のブレースメン

トテストでbグループ)と本学4年制大学生28人(a~dの4段階のプレースメントテストでcグループ)の学習レベルの異なる学生を対象とした。なお、英文法の授業は両グループとも同一のテキスト・教材プリント・テストを使って行っている。

3.2 調査方法

68問からなる質問紙調査を入学後1ヶ月経た5月中旬に行った。2年制短大生と4年制学生は所属が異なるので、それぞれの傾向を把握するため集計結果は別々に求めた。また、所属別に通年成績をほぼ3等分に上位群・中位群・下位群に分けて集計することとした。一集団が8~9名と少人数になり、その集計結果の信頼性が問われるが、各集団にそれぞれに異なった傾向があるのかどうかを確認することで、示唆になるものが得られるかどうかを点検することを一義とした。

3.3 意識調査データ分析と考察

被験者である学生の英語学習に対する基本的な意識は、4段階規準回答で表1のとおりである。

	2年制短大生				4年制学生			
	上位	中位	下位	平均	上位	中位	下位	平均
1 英語の学習は楽しいですか	3.3	3.1	2.6	3.0	3.3	3.3	3.0	3.2
回答規準： 4：とても楽しい 3：楽しい 2：あまり楽しくない 1：楽しくない								
2 あなたにとって英語の学習は？	3.5	3.2	3.4	3.4	3.9	3.9	3.7	3.8
回答規準： 4：非常に重要 3：重要 2：それほど重要でない 1：全く重要でない								

2年制短大生の下位グループはやや低いですが、全体としては英語の学習が楽しいと思っ
ている。また、英語学習の重要性の認識も非常に高い。被験者である学生の英語学習へのモチベーションは高く、この意識は自律学習の基盤となると考えた。

次に、英語学習の得意とする領域順を尋ねた。得意なものを1、不得意ものを8と同位を考えずに得意順に番号を記入させた。結果は表2である。

数値の低い方が、得意であることを示している。両グループとも得意と回答したものは和訳や読解である。中等教育での授業が結果的にはこれらを中心に行われてきたと考えられる。和訳など日本語は学習上、安心感を与える要素かもしれない。本稿が対象とする文法はあまり高くない。4年制学生の下位グループは、意識としてはやや得意としている。両グループで異なる傾向が現れているものは、単語(語彙)の領域である。4年制学生は得意としている。表2をグラフ化すると図2になる。

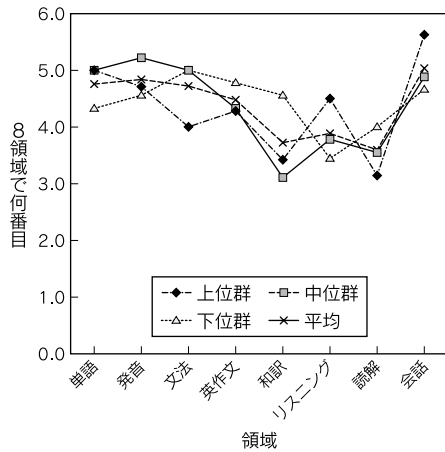
2年制短大生に個人の得意領域の意識の順にばらつきがあり、各学習領域の平均が4番目・5番目に平準化する傾向が強い。4年制学生には順位傾向にやや同一性が見られる。

次に、学習方法や理解を深める方法を尋ねた主な項目の結果が表3である。

表2 得意な領域と考える順位 (1位～8位の順位 MA)

	2年制短大生				4年制学生			
	上位	中位	下位	平均	上位	中位	下位	平均
1 単語	5.0	5.0	4.3	4.8	2.6	3.4	3.4	3.1
2 発音	4.7	5.2	4.6	4.8	6.3	3.9	5.1	5.1
3 文法	4.0	5.0	5.0	4.7	4.6	4.7	3.7	4.3
4 英作文	4.3	4.3	4.8	4.5	3.9	4.6	4.4	4.3
5 和訳	3.4	3.1	4.6	3.7	3.4	3.7	2.9	3.3
6 リスニング	4.5	3.8	3.4	3.9	6.1	5.7	6.0	6.0
7 読解	3.1	3.6	4.0	3.6	3.3	2.7	4.3	3.4
8 会話	5.6	4.9	4.7	5.0	5.9	5.0	6.1	5.7

得意な学習領域(2年制短大生)



得意な学習領域(4年制学生)

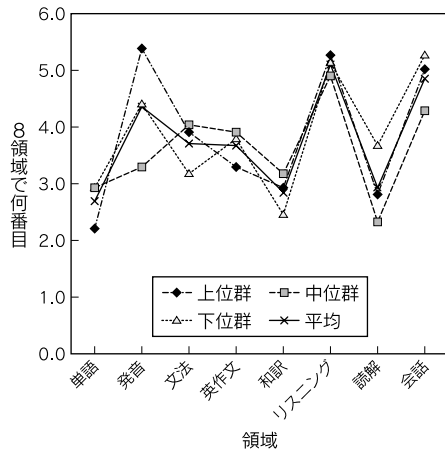


図2 得意な学習領域の比較

表3 英語を学習・理解するための方法について

数値：MA (Mean Agreement)

	2年制短大生				4年制学生			
	上位	中位	下位	平均	上位	中位	下位	平均
1 単語帳には、単・熟語の意味だけでなく、用法や例文なども記入する	3.0	2.1	2.4	2.5	2.6	3.0	2.1	2.6
2 規則やパターンに注目し、句型練習や構文練習をする	2.8	2.2	2.9	2.6	2.7	3.3	3.0	3.0
3 文法力がしっかりしていると、理解しやすく、応用が利く	4.3	3.8	3.2	3.7	4.0	4.0	3.3	3.8
4 文章の構成やつながりに着目し、英文を理解する	3.4	3.0	3.7	3.3	3.0	3.4	2.9	3.1
5 理解できるまで何度もテキストを読み返す	3.4	3.1	2.9	3.1	4.1	3.4	3.4	3.7
6 日本語と英語との類似点や相違点に着目し勉強する	2.8	3.0	2.0	2.6	2.4	3.0	2.4	2.6
7 あらかじめ日本語で内容を把握したあと、英語に置き換え理解する	2.9	3.1	3.0	3.0	3.4	2.7	3.4	3.2

回答規準 5：いつも 4：たいてい 3：ときどき 2：ほとんどない 1：まったくない

全体平均では、4.0以上の結果となったものはない。「文法力がしっかりしていると、理解しやすく、応用が利く」の項目だけが、両上位グループで4.0以上の数値となっている。両グループともこの項目に関する意識はやや高い。文法の重要性は認識していると考えられる。また、4年制学生の上位グループで「理解できるまで何度もテキストを読み返す」が高い数値である。調査項目1、2の結果から、英語の習得に必要と考えられる、豊富な用例・例文に接することや、機能的・演繹的に文構造を理解する機会は少ないように思われる。被験者は、学習意欲はあっても学習の方法がまだ確立せず、効果的な学習方略も設定できていない状況がうかがえる。

表4にあるように、学習の計画性や自己評価については、「これからは、英語は最低限使えないといけないと思っている」という意識は高い。やや高いと思われる結果は「英語学習の目標を決めている」に限られ、その他の項目の結果はあまり高くない。授業内容の工夫も必要であるが、学習方法や学習方略を指導していく必要があることがうかがえる。

表4 学習の計画性や自己評価について 数値：MA (Mean Agreement)

	2年制短大生				4年制学生			
	上位	中位	下位	平均	上位	中位	下位	平均
1 学期ごとの学習内容に従い、予習や復習の計画を立てる。	2.4	2.1	2.6	2.3	2.9	2.6	2.7	2.7
2 英語学習の目標を決めている。(例：ホームステイやTOEIC受験)	3.8	3.3	3.2	3.4	3.3	4.0	3.8	3.8
3 時間や日数を限り、予習や復習をしている。	3.8	2.6	2.8	3.0	3.3	3.0	3.0	3.0
4 テスト直前だけでなく、日頃から予習や復習を計画的に行っている。	3.0	2.3	2.6	2.6	3.3	3.3	2.9	2.9
5 効率よく勉強するために、学習の順番や方法を工夫している。	3.0	2.4	2.8	2.7	3.1	3.3	2.9	2.9
6 授業用のノートの取り方や、単語帳などを工夫している。	2.6	2.3	2.8	2.6	3.0	3.0	2.9	2.9
7 ニカ国語放送番組、映画やインターネットなどを利用して英語を勉強している。	2.8	3.1	2.8	2.9	2.1	2.7	2.4	2.4
8 英語を使う機会を、積極的に見いだしている。	3.1	2.8	3.0	3.0	3.0	3.2	2.6	2.9
9 英語学習に関連した雑誌や書籍を読んだり、友達と学習方法などについて話し合ったりする。	3.1	2.8	2.7	2.8	2.7	2.8	3.1	2.9
10 自分の英語の誤りを発見したり、その理由を探し出したりする努力をしている。	2.1	2.8	2.8	2.6	2.4	3.3	2.7	2.8
11 英作文やスピーチの原稿を書く時には、校正や訂正を何度も行う。	3.9	2.8	3.1	3.2	3.4	3.3	3.3	3.4
12 勉強の進み具合や、内容を確認している。	3.1	2.1	2.7	2.6	2.9	2.8	2.4	2.7
13 学習の伸びや、成果を自分で判断することができる。	2.8	2.1	2.6	2.5	2.1	2.8	2.7	2.6
14 これからは、英語は最低限使えないといけないと思っている。	4.0	4.3	3.9	4.1	4.3	4.7	3.6	4.2

回答規準 5：いつも 4：たいてい 3：ときどき 2：ほとんどない 1：まったくない

前期試験の結果をその出題分野別の得点率で下位者→得点上位者の順に並べ、その傾向を探ることとした。図3がその結果である。前期試験の出題分野は、SVOCなどの文型理解を問う文「構造」、a・theの「冠詞」、時制や態の用法を中心とした「誤文訂正」、熟語や語法を問う「穴埋め」、時制や冠詞の有無、態の用法などによる「文の意味の違い」である。傾向として下位グループは、「穴埋め」「誤文訂正」が弱く、しっかりとした文法力や語法力が定着していないことがわかる。日本語解答による「文の意味の違い」は全体を通して比較的高い。日本語による解答が要因か、暗記による解答が要因なのかは特定できない。

表5の相関表からは、両グループとも「誤文訂正」と「穴埋め」には高い相関がある。2年制短大生の「冠詞」と「誤文訂正」を除いて、全体としてはあまり高い相関は見られない。この時点では、出題分野に文法力の相関関係はあまり見られず、統合された力は育成されていない。

こうした状況を踏まえ、後期の授業方略を立てた。

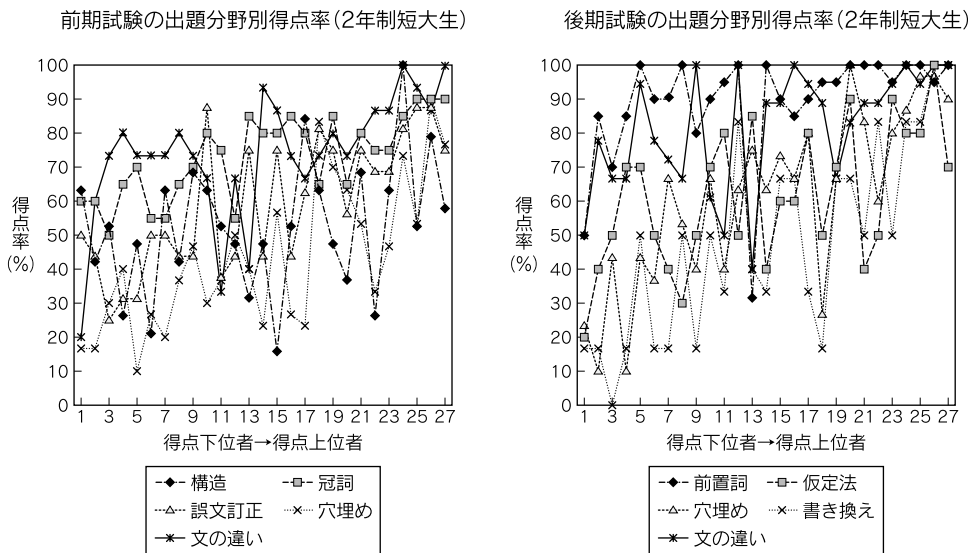


図3 前期試験出題分野別得点率

表5 前期試験相関

	構造		冠詞		誤文訂正		穴埋め		文の意味の違い	
	2年制	4年制	2年制	4年制	2年制	4年制	2年制	4年制	2年制	4年制
構造	1.00	1.00								
冠詞	0.51	0.58	1.00	1.00						
誤文訂正	0.46	0.39	0.76	0.38	1.00	1.00				
穴埋め	0.38	0.47	0.54	0.41	0.70	0.73	1.00	1.00		
文の意味の違い	0.34	0.28	0.64	0.24	0.53	0.27	0.55	0.35	1.00	1.00

4. Grammar 学習方略の実践と成績結果

Dörnyei, Z. (2001) は A process model of learning motivation in the L2 classroom として Pre-actional, Actional, Post-actional の3つのステージに分け Choice Motivation, Executive Motivation, Motivational Retrospectionなどを挙げ、目標設定、達成感への期待、on the job training としての ongoing appraisalなどをキーワードとしている。そこで、意識調査の結果を勘案し、学習（到達）目標や学習内容理解度のモニター、学習方法の定着を図るため、“3-Round Study System” という3ステップ学習を後期の授業より設定し実践奨励した。

3ステップ学習の方略は以下のとおりである。

1st Round 事前学習

- ・次回学習予定のチャプターの英文を前もって3回以上読む。
- ・単語等意味が不明なところは調べておく。
- ・チェッククイズ（全学共通の単語テスト）で8問中7問以上正解できるようにする。
- ・高校既習問題によるチャプター分野基礎力確認テストを行い、自分の理解度を確認する。
- ・TOEIC 対策小テストでは5問中3問は正解できるようにする。

2nd Round 授業中

- ・前もって学習していたことを確認する。
- ・先生からの質問に進んで答えることで学習への取り組みを充実させる。
- ・授業でより深い理解が進むように集中し、ノートテータキングをする。
- ・テキストの英文を十分理解して、書けるようにする。
- ・質問したり、ペア活動で尋ねあったりして、自分で分かろうとする。
- ・学習した英文の口頭による読みの練習を繰り返す。

3rd Round 授業後・事後学習

- ・チャプター学習後の consolidation 確認テストで8割以上正解できるようにする。
- ・学習内容の定着を図るため、英字新聞等の生の教材例文を読む。
- ・その場で理解が十分でなかったことは家庭で確認する。
- ・レビュークイズ（全学実施指定学習定着度確認テスト）で8割以上正解できるよう、学習の定着を図る。

Free Round

- ・インターネットの学習サイトを使って文法問題にチャレンジする。
- ・インターネットや英字新聞、英語雑誌などのまとまった量の英文を毎日読む。
- ・図書館にある読み物などを読んでみる。

チャプター学習前の基礎力確認演習テスト（15問前後）とチャプター学習終了直後に行う consolidation test（15～20問）とを実施することとし、自分の理解度を段階ごとに確認

できるようにした。これにより、目標正答率の設定など目標到達への意識付けを図るとともに期待感をこめて口頭で励ました。授業での作業が増加したため、授業は前期よりテンポよくスピーディに進めることになった。内容に関する問いかけを多くし、学生の発言を促すことにも一層努めた。

結果として、前期・後期の成績を単純比較すると、図4に見られるように両グループとも向上している。2年制短大生（前期：平均60.8、中央値60.0、標準偏差12.0、後期：平均67.6、中央値66.6、標準偏差13.7）、4年制学生（前期：平均62.5、中央値63.7、標準偏差11.0、後期：平均68.9、中央値68.5、標準偏差11.8）の前期成績と3ステップ学習ストラテジー実施後の後期成績をそれぞれT検定にかけ、その効果の有意性を検定した。2年制学生の結果は $p=0.0001<0.05$ 、4年制学生の結果は $p=0.004<0.05$ であった。したがって平均値に上昇傾向が見られ、学習ストラテジーの効果があったと考えられる。

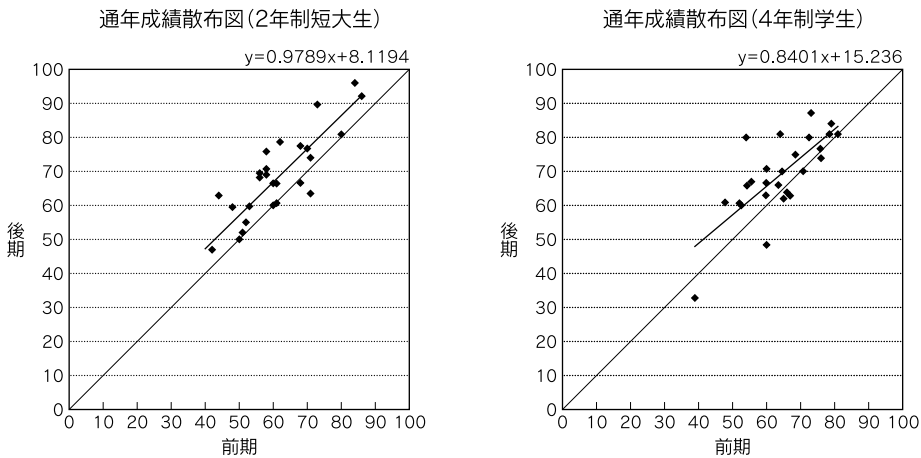


図4 前期・後期成績比較

後期試験の出題分野別得点率は図5のとおりである。前期に比べ「文の意味の違い」や文法学習項目（前置詞・仮定法等）の得点率は全体的にアップしている。「書き換え」や「穴埋め」の得点率にはばらつきがあると同時にやや低いという前期の傾向に変化は見られなかった。したがって、応用力・総合判断力を伴った文法力は期待したほどついていないと考えられる。

それぞれの出題分野同士の相関関係は表6のとおりである。前期と比べて、相関係数は高くなり、分野ごとの学習に相関関係が見られる。前期に比べて、試験出題範囲項目の文法理解が整理されて、多少なりとも統合・総括されて深まったと考えられる。

形式的テストである平常テストの得点率を図6で前期・後期比較すると、後期の日常の学習活動がやや伸びたが、学習方略として設定したチェッククイズ87.5%、レビュークイズ80.0%以上の取得という学習到達目標には達していない。対象学生にとって目標設定がやや高かった結果となっている。

2課学習後にまとめて行う復習のレビュークイズ前期・後期平均得点（32点満点）の個

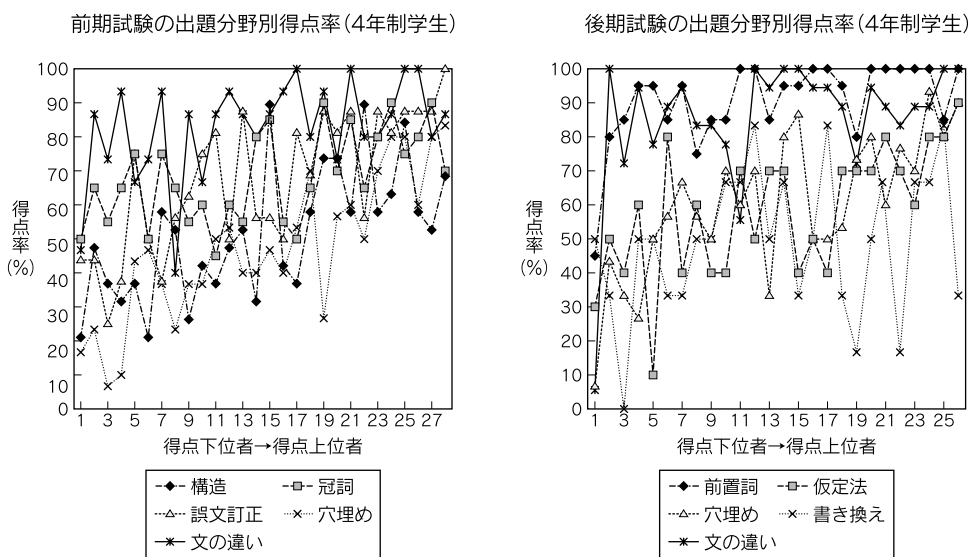


図5 後期試験出題分野別得点率

表6 後期試験相関

	前置詞		仮定法		穴埋め		書き換え		文の意味の違い	
	2年制	4年制	2年制	4年制	2年制	4年制	2年制	4年制	2年制	4年制
前置詞	1.00	1.00								
仮定法	0.41	0.67	1.00	1.00						
穴埋め	0.53	0.76	0.55	0.67	1.00	1.00				
書き換え	0.58	0.55	0.50	0.37	0.75	0.43	1.00	1.00		
文の意味の違い	0.48	0.88	0.32	0.65	0.51	0.74	0.53	0.47	1.00	1.00

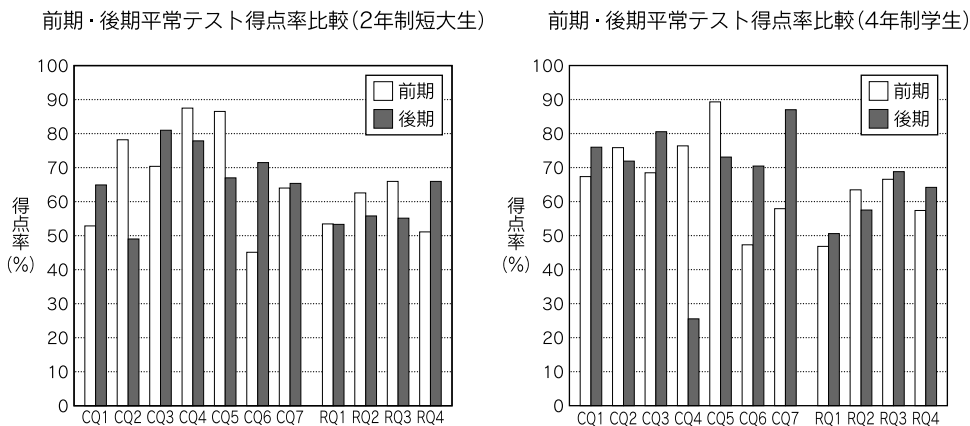
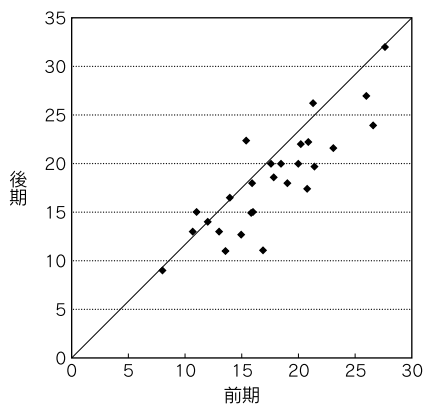


図6 前期・後期平常テスト得点率比較

人比較を図7の散布図から見ると、2年制短大生の場合は正の相関が見られるが、成績はやや下がっている。4年制学生では前期後期の個人平均得点にばらつきが大きく相関が見られない。

レビューテスト前期・後期得点比較(2年制短大生)



レビューテスト前期・後期得点比較(4年制学生)

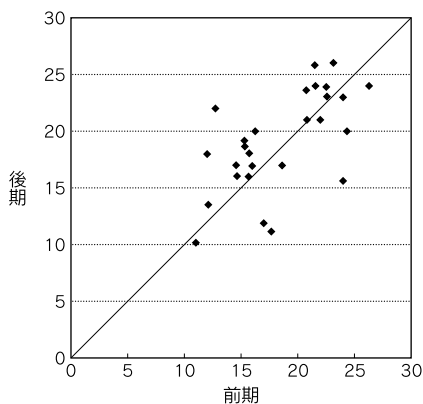


図7 レビューテスト前期後期得点比較

表7 被験者による英文法授業評価

5段階評価の平均 MA

	2年制短大生		4年制学生	
	前期	後期	前期	後期
あなた自身の授業態度について				
授業には遅刻することなく休まず出席した	3.8	4.5	4.7	4.8
私語をせずに授業態度は良かった	3.6	3.4	3.5	3.2
この科目に意欲的に取り組んだ	3.5	3.7	3.8	3.4
予習・復習など自主的な学習努力をした	3.0	3.1	3.3	3.0
授業に対して学習意欲が持てた	3.3	3.5	3.7	3.2
授業内容は良く理解できた	3.6	3.9	3.3	3.3
授業内容について				
授業は、何故そうなのかを自分で考えさせるものだった	3.0	3.5	3.6	3.5
テキストや配布資料は適切だった	3.5	3.9	4.1	3.7
理由や考え方などの説明を通して、十分な知識が与えられた	3.3	3.8	3.5	3.2
授業に刺激され、興味が持てた	3.0	3.4	3.4	3.1
授業内容に関心を持てるような工夫がされていた	3.4	3.5	3.6	3.5
関連する領域に対しての知識が深まった	3.2	3.5	3.5	3.5
この科目は自分にとって有益であった	3.3	3.9	3.8	3.5
授業の進め方について				
学生の理解を助けるためにいろいろな工夫や準備がされた授業だった	3.6	4.1	3.9	4.1
黒板、プリントなどの使い方が効果的だった	3.3	3.7	3.3	3.8
宿題、参考資料の提示などにより自発的な学習を促す工夫がなされた	3.2	3.7	3.4	3.7
授業の組み立て、時間配分は適切だった	3.9	3.7	3.6	3.5
学生の疑問・質問に配慮した説明をする授業進行であった	3.5	4.1	3.9	3.7
担当教員について				
先生は熱意をもって授業を行った	4.0	4.4	4.5	4.4
先生と学生との間にコミュニケーションが十分成り立っていた	4.1	4.3	4.0	3.9

後期の総合成績は伸びを示したが、結果として、後期の成績が伸びたのは最終試験（統括的テスト）の伸びが大きかったことによる。後期に学習方略として目標とした、日頃の

成果による達成感の充実でより積極的な自律学習に結びつけることに関しては期待した効果は上がっていない。

5. まとめと課題

本稿をまとめるに当たって、前期・後期末にそれぞれ実施した被験者による本授業の評価を以下に示す。

学生の「自主的な学習努力」は平均値である。表7から見ると、3ステップ学習の実践結果は、当初設定したモデルの① reluctant learning→② forced learning→③ passing exam learning→④ autonomous learning の段階で、②と③の間のレベルに留まっている。「この科目に意欲的に取り組んだ」の回答平均が4.0以上の結果とならなかったのも、自律学習をめざした情意領域目標を達成したとは言えない。

情意領域目標としてモチベーションを高める要素の一つである教員と学生とのコミュニケーションは高い結果である。Dörnyei, Z. (2001) は Creating the basic motivational conditions として一番目に Appropriate teacher behaviors を挙げている。enthusiasm, commitment to and expectations for the students' academic progress, good relationship with the students, good relationship with the parents などをその要素としている。これらは基本的に必要条件であり、必要十分条件ではない。担当教員に関するアンケート項目の回答結果は情意領域目標の達成に貢献しているとは考えるが、決定的な目標達成の動因にはなっていない。content-base でない英文法という基礎知識の習得という科目では、興味関心の点から自律学習というレベルに達するには限界があるのかもしれないが、今後検証していく必要がある。

学生の形成的テスト結果が期待した目標には至らなかった要因として、①時間がもう少しあれば目標は達成されたか、②目標が高すぎたのか、③目標が不適切であったのか、④指導方法が不十分であったのかの4項目を検証項目と設定し、学生による授業評価の回答結果から考察する。

①に関して、確認テスト等を加えたため授業のスピードが速くなったことも一因で、「授業の組み立て、時間配分は適切だった」が十分であったという回答結果を得てはいないが、不十分であったという結果にもなっていない。②に関し目標が高かったかどうかについては、中等教育6年間の学習後に大学生が学習する英文法の絶対目標としては高くないと考える。③に関しては、小テスト以外に到達目標を与えなかったという点において目標が不適切であったと言えないこともないが、それよりも、目標が個人対応でなく、クラス全体の目標であったことが課題である。学生の自主的な目標設定を取り入れ、個人が個人の目標に向かって努力させる方略が必要であったと考えられる。④に関して、「学生の理解を助けるためにいろいろ工夫や準備がされた授業だった」の評価が高いことから指導方法が不十分であったという結果にはならないと考える。

したがって、学習の到達状況を目に見える形にする目標設定のあり方、個別に対応して設定するということが学習方略の効果を高める要因になると考えられる。ただし、目標値

の設定に意識しすぎると、「学習到達目標は生徒のアウトプットを強調するものである」Valette (1972) ので、学習方略としては到達目標だけに目を向けず、インプットがアウトプットにつながるといった観点を持ち、指導法を検討することが望まれる。

学習モチベーションを高めるには学習者の満足感を充実させることが欠かせない。実践研究においては、その点に関して学習材・指導（フィードバックを含め）・指導者の資質の全体的な関わりから検証することが、今後の研究課題となる。

Fullan (1993) は、The Eight Basic Lessons of the New Paradigm of Change として、次の8項目を挙げている。

1. You Can't Mandate What Matters (The more complex the change the less you can force it)
2. Change is a Journey not a Blueprint (Change is non-linear, loaded with uncertainty and excitement and sometimes perverse)
3. Problems are Our Friends (Problems are inevitable and you can't learn without them)
4. Vision and Strategic Planning Come Later (Premature visions and planning blind)
5. Individualism and Collectivism Must Have Equal Power (There are no one-sided solutions to isolation and groupthink)
6. Neither Centralization Nor Decentralization Works (Both top-down and bottom-up strategies are necessary)
7. Connection with the Wider Environment is Critical for Success (The best organizations learn externally as well as internally)
8. Every person is a Change Agent (Change is too important to leave to the experts, personal mind set and mastery is the ultimate protection)

変革は、複雑な構造を持つ場合強制してもいい結果は生まれず、また固定化した考えでもたらされるものでもない。授業改革・改善も同じことが言える。細かな型にはめられるものではなく、その procedure の中で柔軟に対応してこそ生まれるものである。学習方略は考慮すべき変数が非常に多い故、今後、基礎的な学習能力の習得に向けた実践研究を数多く行い検証することが、全入時代が訪れる高等教育における今後の大きな研究課題の一つである。

参考文献

- 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画、平成15年3月31日。文部科学省
米山朝二 (2003). 『英語教育指導法事典』、研究社
Whitaker, P. (1993). *Managing Change in Schools*, Open University press
Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*, Heinle & Heinle Publishers, Boston
松宮新吾 (1999). 「SLA (第二言語習得) 理論に基づく英語カリキュラム開発とマルチメディア型LL

支援システムの構築に関する研究＝高校生の学習ストラテジー研究を通して＝, 13-30, 資料1-12, 『鳴門教育大学大学院学校教育研究科教育方法コース修士論文』

Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*, Cambridge University Press

Golub, J. (2000). *Making Learning Happen*, Boynton. Cook Publishers, Inc.

Valette, R, Disick, R. 大友賢二訳 (1972) *Modern Language Performance Objectives and Individualization*, 『英語学習到達目標の設定』玉川大学出版部

Fullan, M. (1993). *Change Forces, Probing the Depths of Educational Reform*, The Farmer Press

Appendix (補遺)

英語学習に関するアンケート

- 1 英語の学習は楽しいですか。
4：とても楽しい 3：楽しい 2：あまり楽しくない 1：楽しくない
- 2 あなたにとって英語の学習は…？
4：非常に重要 3：重要 2：それほど重要でない 1：全く重要でない
- 3 得意なものから順番に番号を付けてください。【得意1→不得意8】
単語 () 発音・アクセント () 文法 () 英作文 ()
和訳 () リスニング () 読解 () 会話 ()

英語学習のための学習方略自己評価・自己診断調査票

5. いつも 4. たいてい・ふつうは 3. 時々 2. ほとんどない 1. まったくない

Part 1 単・熟語の記憶方法についての質問

- 1 単・熟語は、例文や単文の中で覚える。
- 2 単・熟語は教科書の内容と結びつけて覚える。
- 3 単語は、同意語、反意語などといっしょに覚える。
- 4 単語は、語源や由来といっしょに覚える。
- 5 単・熟語は、品詞別に分類したり、内容別にグループ化して覚える。
- 6 単・熟語は、頭の中で具体的なイメージと結びつけながら覚える。
- 7 単・熟語は、何度も何度も声に出して覚える。
- 8 単語の発音やスペリングは、それぞれのルールを知っていると覚えやすい。
- 9 単語の発音は、日本語的にカタカナ発音で覚える。
- 10 単語の発音は、リズムやイントネーションを利用して覚える。
- 11 単語は、発音とイメージとを結びつけながら覚える。
- 12 一つの単・熟語からイメージが広がり、次々に辞書を使って関連した語や語句を調べる。
- 13 「こんな表現があるのか」と気づいた時は、うれしくなり、特によく覚える。
- 14 単・熟語は、とことん書いて覚える。
- 15 単・熟語は、練習問題を数多くこなすことにより覚える。
- 16 単・熟語は、徹底的に繰り返し練習することにより覚える。
- 17 単・熟語は、予習よりも、復習を中心に覚える。
- 18 単・熟語は、【英語】→【日本語】で覚える。
- 19 単・熟語は、【日本語】→【英語】で覚える。
- 20 単・熟語は、【英語】→【英語】で覚える。

Part 2 英語を学習・理解するための方法についての質問

- 21 単語帳には、単・熟語の意味だけではなく、用法や例文なども記入する。
- 22 リーディングやリスニングの時には、メモやノートをとったり、重要なポイントに下線を引いたりする。
- 23 リーディングの時には、意味を理解するために、英文に区切りやマークを入れながら読む。
- 24 規則やパターンに注目し、句型練習や構文練習をする。
- 25 新しい内容を理解するためには、これまで学習した英語の一般的な規則をあてはめる。
- 26 文法力がしっかりしていると、理解しやすく、応用がきく。

- 27 特定の内容に注目し、英語を読んだり聞いたりする。
- 28 文章の構成やつながりに着目し、英文を理解する。
- 29 理解できるまで何度もテキストを読み返す。
- 30 発音練習は、テープのモデルリーディング（模範）に従って行う。
- 31 大切な単・熟語は、英作文や英会話の中で意識的に使う。
- 32 和訳や英訳の時は、単・熟語にはとらわれず、内容的な正しさを重視する。
- 33 日本語と英語との類似点や相違点に着目し勉強する。
- 34 異文化の社会や状況をイメージしながら、聞いたり読んだりする。
- 35 英作文や英会話では、頭の中でイメージしたものを英語に訳す。
- 36 あらかじめ日本語で内容を把握した後、英語に置き換え理解する。
- 37 予備知識や関連した内容を手掛かりに、英語を理解しようとする。
- 38 全体の概略や内容を把握した後、各部分の学習をする。
- 39 「英語をなんとなく理解することができる」ということに満足ができる。

Part 3 英語が理解できない場合やコミュニケーションがうまくいかない場合の対処方法について

- 40 状況や場面、前後関係（文脈）などを手掛かりに、理解できない語や語句の意味を類推する。
- 41 相手の表情やしぐさから意味を読みとる。
- 42 会話では、それまでの内容に基づき、相手が言うことを予測しながら対話を進める。
- 43 相手に意味が通じない時には、ジェスチャーを使ったり、体で表現したりする。
- 44 会話中に適切な表現が思い浮かばない時には、どう表現したらいいか相手に聞いてみる。
- 45 適切な表現が思い浮かばない時には、英語にとらわれず、日本語を交えながらしゃべる。
- 46 理解できない時でも、どうにかこうにかしてコミュニケーションを続ける。
- 47 理解できない時は、そのことを相手に伝え、話す速さや表現方法を変えてもらう。
- 48 単語や表現がわからない時は、知っている言葉を組み合わせて、どうにか説明する。
- 49 自分が知っている内容に相手を引き込むように話題をつなげる。

Part 4 学習の計画性や自己評価についての質問

- 50 学期ごとの学習内容に従い、予習や復習の計画を立てる。
- 51 英語学習の目標を決めている。（例：ホームステイや英検などの認定試験の受験）
- 52 時間や日数を限り、予習や復習をしている。
- 53 テスト直前だけではなく、日頃から予習や復習を計画的に行っている。
- 54 効率よく勉強するために、学習の順番や方法を工夫している。
- 55 授業用のノートの取り方や、単語帳などを工夫している。
- 56 二カ国語放送番組、映画やインターネットなどを利用して英語を勉強している。
- 57 学校外や授業外の行事・プログラムに参加し、英語を勉強するようにしている。
- 58 英語を使う機会を、積極的に見いだしている。
- 59 英語学習に関連した雑誌や書籍を読んだり、友達と学習方法などについて話し合ったりする。
- 60 より正確で適切な表現を使うようにしている。
- 61 自分の英語の誤りを発見したり、その理由を探し出したりする努力をしている。
- 62 英作文やスピーチの原稿を書く時には、校正や訂正を何度も行う。
- 63 勉強の進み具合や、内容を確認している。
- 64 学習の伸びや、成果を自分で判断することができる。
- 65 これからは、英語は最低限使えないといけないと思っている。